

田んぼとの暮らし方

－ 地産地消によるコミュニティの再建 －

R09055 中橋 茉優子

指導教員 澤 田 英 行

I. はじめに

私たちはひとりで生きていく事は出来ない。しかし、現代ではご近所付き合いという関係は無くなりつつあり、高齢者が孤独死する時代となってしまった。

II. 背景

高齢者の孤独死、この問題の背景には人々が都市に寄生している社会がある。都市に情報や仕事やモノを求め、都市と繋がることによって満たされる生活を送る。従って自分の住む土地への愛着心は薄れ、人々に感心をもたれなくなった土地は自立する力を失った。今一度住人の手で土地に自立する力を与えるべきだ。

III. 目的

かつて見沼区は田んぼによって多くの人々の生活を支えてきた。しかし今では、田んぼを営む人以外の住人の生活を支えているのは都市となってしまった。

田んぼに再び目を向けさせるきっかけとなる建築を提案し、そこで行われる行為によって自立したまちへと変化させる。

IV. 敷地選定・分析



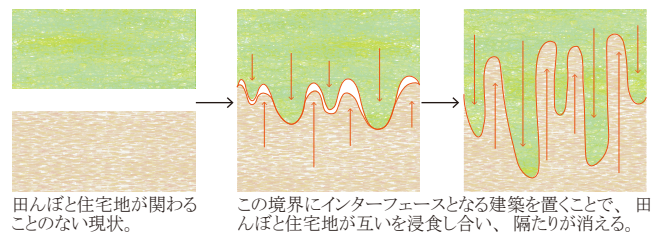
埼玉県さいたま市見沼区春野。対象敷地北側には田んぼ、南側には住宅地が広がっている。田んぼを営む人々は田んぼより北側に住み、昔からのコミュニティによって協力し合いながら農業に励んでいる。一方住宅地に住む人々は田んぼ側に背を向けて家を建て、毎日電車で都市に出向き、都市に支えられ生活している。両者の人々が関わることはない。



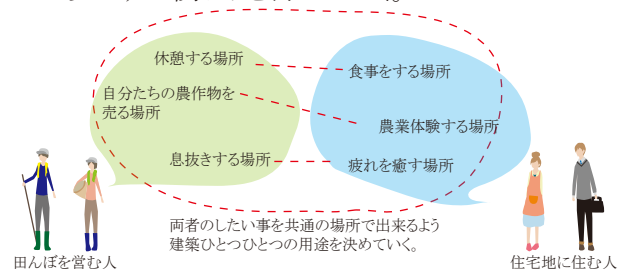
対象敷地はもともと海であったが、海面水位が下がり湿地帯となった。江戸時代中期になると湿地に堤をつくり水をせき止め、戦後の食糧増産を支える貴重な田んぼとして利用された。しかし、高度経済成長期を迎えると田んぼは住宅地等へと変わっていつてしまう。そんな中、昭和 33 年に狩野川台風が関東地方を襲い、大洪水が起こった。その時見沼田んぼの遊水機能により下流の被害が抑えられたため、見沼田んぼを保全していこうという動きが活発になり、今も保全団体の努力により姿を保っている。

V. 提案

今は深作川を境界に関わることなく隣接している田んぼと住宅地。この両者のインターフェースとなる建築を設計する。

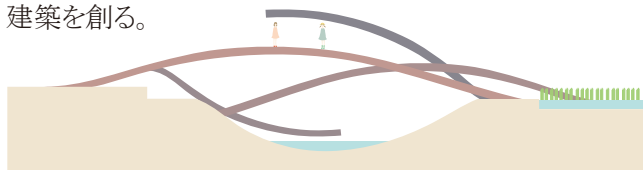


ここで関わり合うのは、昔からここに住んでいる田んぼを営む人々(田んぼ側)と、住宅地に住み都市で活動をしている人々(住宅地側)。人々は田んぼをきっかけにして少しずつ関わりを持っていく。

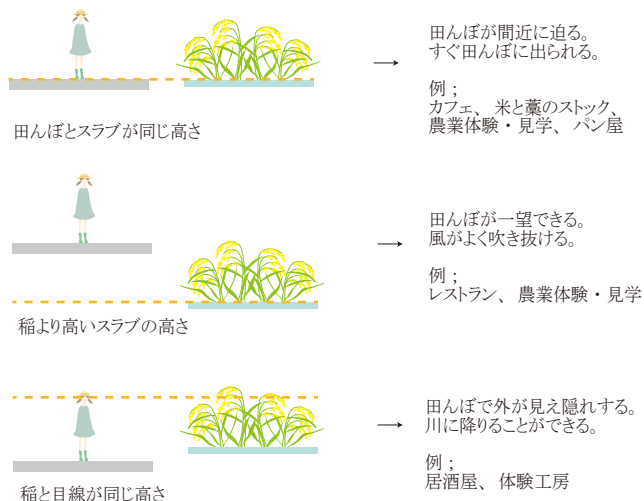


VI. 設計手法

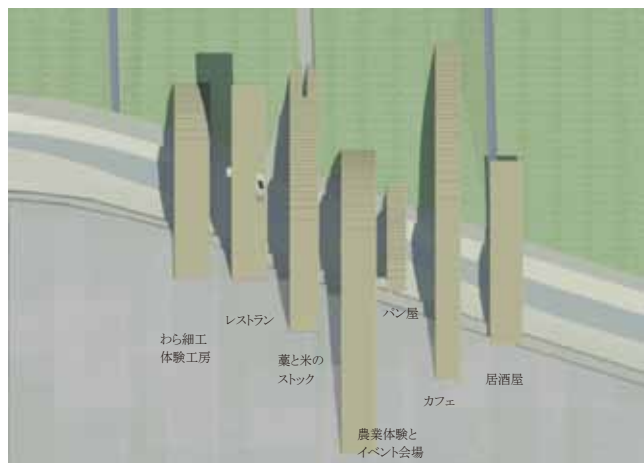
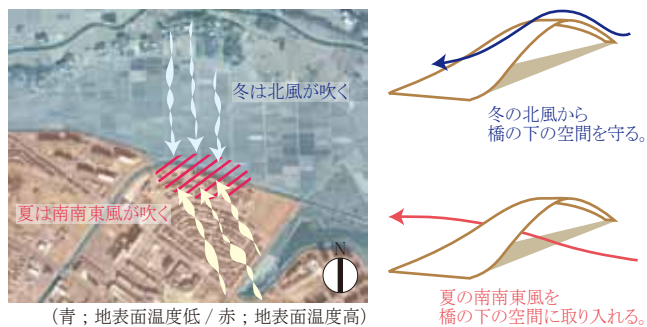
①田んぼと住宅地を繋げるために、橋を架けるように建築を創る。



②田んぼと様々な関わり合いができるように、レベルの違うスラブを設ける。



③田んぼ側と住宅側の地表面温度の違いから、対象敷地は風がよく吹く。季節ごとの風向に合わせた形態を採用する。



VII. パース



VIII. 全体構成



IX. おわりに

田んぼと住宅地の境界に、田んぼをきっかけに人々を集める、インターフェースとしての建築を創る。この建築によって、関わることのなかった人々が関わるようになる。この建築は人々の手で地域の資源を利用し修復を繰り返しながら利用され続ける。やがてこの周辺地域の人々の生活を支える存在になり得るだろう。結果、この建築の周辺は地産地消の社会へと変化する。この地の資源を皆で守り、利用し、人々が支え合い助け合いながら生活をする地域となる。

X. 参考文献

- ・馬上精彦，大岩剛一，宮崎清，安藤邦廣，小松義夫 (2000) 『草のちから、藁の家』INAXo
- ・ピーター・ウォーカー (1997) 『見えない庭-アメリカン・ランドスケープのモダニズムを求めて』鹿島出版会